松坂屋のお正月

平成27年11月28日（土）→平成28年2月23日（火）

「一年の計は元旦にあり」などというように、一年の節目として、日本人はお正月をことのほか大切にしてきました。

松坂屋でも、江戸時代から現代まで様々な慣習や行事でお正月を迎えてきました。

松坂屋のお正月の光景は、江戸を代表する呉服店として錦絵にも描かれています。

新しい年の始まりのご挨拶として、松坂屋では江戸時代すでに顧客へ年賀の書状を出していました。

明治時代になり、郵便制度が整うにつれ、私製はがきが登場すると年賀はがきでのご挨拶が本格化。

次第に自由に趣向が凝らされるようになると、松坂屋の年賀状も華やかなものとなっていきます。

茶屋町から栄町に進出し、百貨店「いとう呉服店」を開業し迎えた翌明治44（1911）年のお正月の初売りには、百貨店初といわれる福袋「多加良函（たからばこ）」（宝箱）を登場させました。

また、同年に始まった「コドモ会」は、お子様たちに人気を博し、その後お正月の恒例行事となりました。

伝統行事に加え、時代とともに新しい「お正月らしさ」を創出してきた松坂屋。

今回の企画展では、江戸時代から明治、大正、昭和にかけての松坂屋のお正月の光景、初売り、年賀状、新聞広告、PR誌、さらには顧客へ配布した手ぬぐいなどをご紹介いたします。

また、江戸時代のお正月に思いを馳せ、「松坂屋コレクション」よりおめでたい意匠の小袖を特別展示いたします。

お正月の賑わい

◉江戸時代

「上野広小路正月の賑ひ」歌川国芳（天保年間）

下谷広小路のお正月の風景を美しいファッションとともに歌川国芳が描いた浮世絵が残っています。背景にあるのは上野松坂屋。国芳は幕末期に歌川派を最大の流派にした豊国の門弟です。今日のファッション広告の原点ともいえる美人を描いた錦絵です。

◉明治時代

・「多可良函（たからばこ）」

明治43（1910）年に百貨店に業態転換して迎えた翌44年の初売りに、百貨店初といわれる福袋「多可良函」(宝箱)を登場させました。価格の10倍もする雑貨が入っているとあって、前夜から長蛇の列ができ、当日も雑踏を極めました。その後3年間続いた多可良函の販売は、あまりの混雑に、当局から警備に責任が持てないといわれ、大正2（1913）年を限りに中止となりました。

多可良函

・コドモ会

多可良函を初めて販売した明治44（1911）年のお正月、いとう呉服店では、お得意様のお子様をホールに招待して「第1回 コドモ会」を開催しました。記念絵葉書の配布、おとぎ話、狂言、映画の上演、またピアノやバイオリンの演奏があり、大好評を博しました。第2回以降は、全館をあげて様々な趣向を凝らして行うようになり、お正月の恒例行事となりました。

第3回 コドモ博覧会
案内冊子
大正2(1913)年

年賀状

松坂屋では江戸時代から顧客に年賀の書状を出していました。本格的になったのは、明治時代になり、郵便制度が整う中で、私製はがきが郵便物として利用できるようになった明治33（1900）年以降のことです。昭和30年代以降は、原画を著名な画家に依頼するようになり、より華やかになってきました。

明治38（1905）年

昭和3（1928）年

昭和48（1973）年「燦春」堂本印象画

・片岡球子（1905～2008年）

昭和20年代に始まる片岡球子と松坂屋のゆかりは深く、昭和51（1976）年から平成6（1994）年にかけては、年賀状5枚のデザインを依頼しています。その内4枚は富士山を題材としています。他の1枚『雅楽　蘭陵王』については、片岡球子直筆の解説文の原稿が残っており、今回、原画とともに展示いたします。

昭和51（1976年）「雅楽 蘭陵王」

昭和63（1988年）「めでたき富士」

お正月の宣伝

百貨店への業態転換を見据えた明治39（1906）年、松坂屋はPR誌「衣道楽」を創刊しました。その第2号、明治40（1907）年1月1日発行の誌面に「謹賀新年」の広告が掲載されています。その後のPR誌「モーラ」、「マツサカヤ」などの表紙は、斬新なデザインでお正月を表現しています。

「衣道楽」明治40（1907）年

「マツサカヤ」昭和5（1930）年

江戸時代の晴れ着 ～松坂屋コレクション～

◉「宝船模様小袖」（前期展示）

「打出の小槌」、「分銅」、「隠れ蓑」「隠れ笠」、「巾着」などの宝尽くしと、帆を張って進む勇壮な宝船を、絞りと友禅染、色糸・金糸の刺繍などで表現し、吉祥模様を華やかに散らす友禅染の優品です。宝船が描かれた図を一月二日の夜、枕の下に敷いて寝ると吉夢を見ると言われています。

◉「南天鶏模様小袖」（後期展示）

紫の縮緬地に右裾から両袖に向かって南天の立木と、裾には鶏たちが、金糸と色糸による細かい刺繍により表されています。南天は、「難を転ずる」に通じることから縁起の良い木、幸福を招く木として親しまれてきました。寒中にたくさん赤い実をつけることが喜ばれ、お正月の飾りとして松竹梅とともに用いられます。